

ロバを飼う

(1)

ゆつたりとした、四月の朝だった。封切りのモカをコーヒーマーカーに入れ、スイッチを押した。キツチンの小窓を開けると、かすかに冷気を含んだ空気が流れ込んできた。

こうばしい香りがダイニングまで広がった時、夫の順平が起きてきた。

「お、は、よう」

笑顔で迎える自分が、新鮮だ。あわただしいだけで会話もない朝は、もう過去なのだ。

文系の大学を出た私が、小さな医院の受付兼会計係として勤め始めたのは、三十二年も前になる。その間に医院は増築を重ね、若いスタッフの数も増えていった。それに連れて、医療関係の資格を持たない私は、次第に雑用係へと押しやられていった。はじかれていく惨めさを、がむしやらに働くことで振り払おうとし

小川 はつ子

た年月だった。

順平は退職に同意してくれなかった。家のローンが残っているからとか、娘のチナが結婚するまでは、とかいうのが理由だった。

しかし、そのローンが終了し、去年の秋にはチナも結婚した。春を先取りするように庭の梅の木が慎ましげな白い花を咲かせ、そして散った時、やっと退職したのだった。

仕事に追われている間に、家の中には無秩序に物があふれかえていた。それを少しずつ片づけて、おしゃれに変身させるのがこれからの楽しみになっている。

順平が顔を洗っている間に、庭のチューリップを一本切ってきて、食卓の花瓶に挿した。一輪の赤が華やかさを添える食卓に、二人で向かい合った。

「タンスの前に脱ぎっぱなしの順ちゃんのパンツ、クリーニングに出しておくね」

馥郁としたコーヒーの香りと緩い気分を満喫しながら、語りかけた。

「何でクリーニングなの」

順平が怪訝そうに聞き返した。

「だって、あのパンツはウールだよ。洗濯機で洗うのは……」

そこまで説明して、彼の勘違いに気づいた。パンツといえば、最近ではズボンのことをいうが、彼にとってパンツは下着なのだ。

「ズボンのことを言ってるの。出しとくね、クリーニング」

「うん」

気が無さそうに答える彼を見ながら、二人が高校一年生だった日のある出来事を、ふと思いつ出した。

「山川先生が、アメリカ人の友人を連れてきたのを覚えてるでしょ？ あの時……」

残り少なくなったコーヒーを、カップの中で回しながら話しかけた。

英語の山川先生は、ズボンをトラウザウスではなく「パンツ」と呼んでいた。

下着のパンツを連想した生徒達は、半信半疑で大笑いしたものだ。ある日、先生はステイプンという友人を伴って教室

に現れた。

「あの時、ズボンを英語で何と言うのですか、小学生みたいな質問をした人がいましたよねえ」

いたずらっぽく目を、順平に向けた。

「忘れた」

素っ気ない返事とともに、彼は席を立った。

二人が共有した愉快な「あの時」を思い返して、一緒に笑いたかっただけに、彼はどうしたんだろうと思った。青春の時間を詰め込んでふくらんだ風船は、あつてなくしてぼんやりした。

着替えを済ませた順平は、ずっしりと重い仕事用の鞆を持ち上げると、眉根を寄せて玄関に向かった。鞆には、作業中の書類のほかに、参考図書類やノートパソコンまで詰め込んである。上がり框にそれを置くと、片足を靴に入れてため息をついた。それから、ゆっくりともう片方の足を靴に入れる。むっつりと押し黙ったままだった。

「いつてらっしゃい」

「ああ」

左手に鞆を提げ、右に少し傾いた後ろ姿が玄関を出て行った。

『ズボンはパンツと言います』

ステイプンが答えた時の、順平のおどけた笑い顔が鮮明に浮かぶ。あの屈託無く笑った少年は、もう彼の中にいないのだろうか。

今朝の不機嫌さを年月の経過のせいだけにするには、割り切れないものが残った。グレーチングをカタンと鳴らし、順平の白いプリウスが出ていった。

(2)

プールを四周したところで、前を歩いていた雪絵が立ち止まった。

ゴールデンウィーク後から始めた水中ウォーキングは、今日で三回目だった。ウォーキングといっても、ただ歩くだけではない。曲げた膝で水をかいたり、上半身を左右にひねったりして進むのだから、結構な運動量になる。少し休憩したくなる頃だった。

「きついなえ」

雪絵はプールの壁にもたれかかって言った。私はサイドに手をかけ、水中で腰を伸ばした。遅れて歩いていた玲子が、「歩き方のコツが分かったみたい」

ほっそりした腕で派手に水をかきながら、追いついてきた。

「夫の両親がウチで同居する話だけど、いよいよ本決まりになったのよ」

壁にもたれた百七十センチの長身を、あこの近くまで水に沈めて雪絵は言った。

彼女は義父母との同居を嫌がってはいない。しかし大歓迎でもないことを、私は知っている。

「大変だと思うけど、心を込めてお世話してあげて。ご両親にも雪ちゃんにも、それがきつといいよ」

順平の両親はすでに亡く、同居の経験もなかった。口幅つたいとは思ったけれど、そんなことしか言えなかった。雪絵は、につこりしながら頷いてくれた。

「それと、やれないことは勇気を持ってやらない！」

きつぱりと言ったのは、玲子だった。彼女は義母の介護真っ最中だ。雪絵がまた頷く。

「レコちゃん、それって、つい手を出したくなっても、できることは自分でさせるってことなの？」

「それもある。でも、やってあげたくて

もできない時だつてあるからね。そんな時は、できないつて割り切る勇氣もいるわ」「やる時は心をこめてやる。やれない時は勇氣を持つてやらない」

雪絵は、納得したようにつぶやくと、また先頭で歩き出した。長い両手を水中で大きく振つて進む彼女の後から、私と玲子も並んでスタートした。

三人は大学の同期生だつた。卒業後、雪絵は県立高校の国語教師になり、職場結婚をした。退職したのは、私より一年早い。玲子は銀行に勤めていたが、今はお寺の奥様に専念している。

三人とも職を離れ、子ども達も独立していた。玲子は、心が強くてさつぱりとした気性だ。雪絵の方は、感情が落ち着いていておっとりしている。私が自分にも欲しいと思う良さを、二人は持つていた。

プールから上がつて着替えを済ませると、二時を過ぎていた。

「帰つたら同居準備のための片づけをするの。心をこめて、やるね」

「私は、お義母さんがデイサービスから帰るまでに段取りよく家事仕事をしなぐちや。奈津子は？」

「今から実家に行つて、両親を買い物に連れて行く」

私達、介護三姉妹だな。実家へ向かつて車を走らせながら、思つた。

自営業だつた両親は、事業を兄夫婦に譲つた後、しばらくは気ままな二人暮らしを続けてきた。父の運転で、思い立った時に行きたい場所へ出かけ、好きなことをしては、

「今が一番幸せや」と言つていた。

ところがここ数年、足腰がずいぶん弱つてきた。車の運転は危険だからと、父は先月、車を手放した。自ら決意したのは立派だが、最寄りのバス停は一キロも離れている。案の定、「スーパーに行きたい」「病院に行きたい」

そう言つては、声がかかると言つた。八十年代後半に入る父母を外に連れ出してやりたいと思うから、呼び出しが無くても毎日のように実家に通つていた。

前触れなしの訪問を、二人は仲良くソファアに腰掛けたまま、当たり前のように出迎えた。体調をたずね、世間話をし

ながら台所を掃除した。それから、居間の机の上に散らかつた物を片づけた。

「いつもきれいにしてるから、掃除なんかしてくれんでもいいのよ」

「わしの書棚は触らんといてくれよ」

脱いだ衣類が背もたれに積み重なつたままのソファアに座り、私の作業を不服そうに言う。それを無視して床に軽く掃除機をかけた後、スーパーまで買い物に連れ出した。

私をとまどわせたのは、帰宅したとたんにかかつてきた父からの電話だつた。

「机の上に置いといた新聞の切り抜きが無くなつとる。あんた、知らんかな」

いつも「奈つちゃん」と呼んでくれる父が、他人のように「あんた」と言つた。冷たい言葉に込められた憤りが、私を慄然とさせた。

動揺を抑え、居間の机上を片づけた時のことを思い返してみた。飲み終えた菓子の袋を、ゴミ箱に捨てた。雑然と置かれたままの物を、整とんした。その時、確かに切り抜きは無かつた。

それを伝えても、「連載記事をファイルに綴じるのが、毎

日の楽しみやのに」

「今日の分が無くなつたんや」

くどくどと繰り返すばかりだった。はっきりとは言わないが、無断で捨てられたと思ひこんでいた。

疑つてかかる父に対し、激しい怒りが湧き起こつた。怒りは、私に荒々しく車を走らせ、三十分の道のりを実家へと引き返させた。

まず、父の目の前でゴミ箱をひっくり返し中身を確認させた。捨てていないことを証明すると、次は机上のものを一つ一つ確かめていった。座布団もひっくり返して見た。最後は食器棚の中まで調べたが、切り抜きは出てこなかった。

十分程もそんなことをしていると、怒りは悲しみといたわりに変わつていった。

今の父にとって、切り抜きは大切なものなのだ。たかが切り抜き一枚に、子どものように執着する父が悲しかった。

「やる時は、心を込めてやる」

プールでつぶやいた雪絵の声が、思い出された。そもそも自分が言いだしたことなのに、思いやりを持って両親に接していない自分が情けなくなつた。

記事は、書棚に並べたファイルの中に見つかった。

「ちゃんとして自分で整理しとつたんやなあ」

そう言つて、父と母はたわいなく笑い合つた。その場になぜ私がいるのか忘れてしまつたように、「悪かつたな」も「ありがとう」も無かつた。

自分が仕事に追われている間に、両親はこんなにも老いてしまつたのか。帰路のハンドルを握ると、悲しみは重さを持つて胸の底に沈み、涙を作つた。

私の車は、のろのろと家に向かつた。

(3)

日曜日と隔週の土曜日が、順平の休みになつている。仕事を辞めても、やはり夫の休日前が一週間て一番くつろげる。夕食の支度も普段よりのんびりしていた。

「七月四日、誕生日だつたよね」

出始めのスナックエンドウを沸騰した鍋に放り込みながら、ダイニングの順平に声をかけた。

「三日だよ！……何でまちがうんだ」

「ごめん、ごめん。ねえ、何が欲しい？」
プシュツと、缶ビールを開ける音がする。

しばらくして、

「ロバ」

順平は言つた。

「ロバって、まさか生きてるやつ？」

「……」

誕生日をまちがえられて、腹を立てたのだから。ロバなんてとんでもないことを言い出したのは、きつと当てつけだ。

それにしても、どこからロバなんて思いついたのだろう。たしか初めてロバを見たのは、新婚旅行で行つたエジプトだった。のんびりした動きに、ほのぼのすると彼は言つた。しかし、それ以上の特別な関心を持つた風でもなかつた。

「何でロバなの」

「ロバに乗つて、会社に行く」

難しい顔をして、妙なことを言つた。

いくら怒っているからつて、ふざけ過ぎている。冷蔵庫で冷やしておいたサラダとラタトゥイユを食卓に運びながら、私はふくれてみせた。

家から会社までは車で二十分程だが、ロバなら一時間以上かかるだろう。その道を、ロバと順平が行く姿を想像してみた。

小柄なロバにまたがった彼の足は、地面に着きそうになっている。カッポン、カッポンと悠長な歩みで進む。空を見上げて止まる。小川をのぞきこんで、また止まる。追い越していく車の中に、背広姿がロバにまたがっているのを見つけて驚く顔が見える。

「愉快 愉快。新聞に載るかもね。朝早く家を出ないと、間に合わないよ。会社で駐ロバ場はあるのかしら。夜は家に入れてやったほうがいいよね。ハハハ」
皿に移したスナックエンドウは、まだ熱い。ふうつと息を吹きかけ、意地悪を言ってみた。こんな時、順平は必ず何か言い返すし、私もまた言い返して、笑い合う場面になるはずだった。

ところが、反応はなかった。それどころか、視線を斜めに落とした横顔の、顎のあたりに力がこもっていた。

「怒ったの」

「いや」

本気で怒った時なら、返事をしない。彼を怒らせたのではないと分かっていたが、それじゃあ、この不機嫌はどこから来るのだろう。私の疑問は行き場を探る。

そう言えば今朝も、片方の靴に足をすべり込ませた後ため息をつき、それからもう片方に足を入れ出勤していった。夫を悩ませるような何かが、職場で起きているのだろうか。おぼろげな不安が、芽を出した。

順平が勤めるM社の事業内容は、事務機器の販売とメンテナンスが主である。中部圏を中心に展開するM社の営業所は県内に四か所あるが、彼が勤務するのは市内の営業所だ。入社当時は外回りに出されたが、陽気で社交性のある彼には結構楽しめる仕事だった。

時には、言いがかりに近いクレームをつけられて、腹立たしい思いもしたようだ。しかしそれも、職場の仲間からなくさめや同意をもらうことで解消された。

だから、夕飯を食べながら聞かされるのは、筋が通らない相手にどう対応したとか、同僚も上司も理解を示してくれたとか、全て解決済みの話ばかりだった。

ここ数年は、社内での事務仕事だけが担当になっていた。それまでの経験をかかして、外回りの新人達へのアドバイスと励ましを心がけていると、順平は言っ

ていた。

そんな状態だったから、仕事上の悩みや苦勞を抱え込んでいまいかなどと氣遣ったことはなかった。それなのに……。

おぼろげだった不安が、確かな輪郭を持って広がりはじめた。

『ロバに乗って会社に行く』

どんな思いが、そう言わせたのだろうか。

「何か、嫌なことでもあったの」

「別に」

どんなに問い詰めても、答えてくれない順平だと分かっている。

聞き出した衝動を押さえなくてはいけない。どう解決するのか、しばらく様子を見よう。関われな以上は、玲子が言ったように、やれないことに勇氣を持たなくては。

私が今も働いていたら、両親の老化に無頓着だったように、夫のこんな小さな変化にも気づかなかつただろう。気づいただけでも、夫にとっては救いになったかもしれない。

(4)

梅雨が明けると、異常に暑い日が続い

た。連日のように高温注意報が出され、熱中症で倒れる人や予防対策が、ニュースをにぎわせた。

両親の体力は、急激な衰えを見せ始めていた。室内で過ごす時間が多くなり、郵便受けには朝刊が差しこまれたままになっていった。父が長年の趣味にしてきた盆栽は、水をもらった気配がない。母の自慢の花壇は、ヒヤクニチソウもインパチェンスもすっかり弱ってしまい、雑草だけが旺盛に生育している。料理を作るのも片づけるのも、なおざりにしているのだろう。悪臭のする生ゴミを捨てようとする、無数のコバエが飛んだ。

父と母は、どんなときも理性的で優しかった。どの時期の記憶をたぐっても、甘すぎる程に私を可愛がってくれた。迷っている時には、正しい選択に導いてくれた。悲しんでいれば味方になり、守ってくれた。「私より先に死なないで」と無茶なことを言っただけを戸惑わせたがら、私は二人を頼りにしてきた。

それだけに、切り抜き記事が無くなつたと言っただけには、両親が認知症になっているのではないかと衝撃を受け

た。不安は、すぐに兄夫婦に電話で伝えていた。しかし、両親の近くに住みながら、めつたに実家をのぞかない兄の反応は鈍かった。

その兄も両親の異変に気づいてくれたのは、八月だった。盆休みを利用して順平と旅行することになり、その期間、両親の様子を見てくれるように兄に頼んだ。両親と接する時間が増えたことで、兄も現状を把握できたのだった。

八月の末。介護三姉妹が雪絵の家に集まった。

「今年は特別忙しかったわ。お盆に寺が忙しいのは当然だけど、檀家さんで亡くなる人が続いってね。猛暑のせいよね。それで、和尚さんは人気アイドルみたいに引つ張りだこだったの。お義母さんは、デイサービスに行くのを嫌がるしさあ」「ご住職の妻も忙しかったわけね。私は、気楽に過ごせた方かなあ、同居スタートは十月だしね。落ち着いて家で準備ができたわ。奈っちゃんとは、どうだったの」

「父も母も状態は良くないけど、兄夫婦が助けてくれるから何とかね。おかげで、

夫とハワイへ行って来たの」

忙しかった玲子と外に出られなかった雪絵に気が引けたが、旅先でのゴルフの話聞いてもらった。

「夫が、この時はやはり大はしゃぎで。それ以来、まあまあご機嫌がいいの」

「良かったじゃない」

二人は、他意のない笑いで応えてくれた。「うちの和尚さんもね、檀家回りで疲れた疲れたってさん言いながら、ゴルフには飛び出して行くのよ」

ゴルフ好きの夫を持つ玲子の話をきかけに、しばらくはそれぞれのおもしろい話で盛り上がった。

「うちのも可笑しいんだよ。学校の物をあちこちに置いて、何か月でも積み上げたままにするの。それを片づけると、覚えて置いてあったんだ、って主張するんだから」

「仕事で疲れているのかしらね」

玲子の言葉に、

「今は、どこの仕事も大変でしょう」

雪絵が、私を見つめて言った。

雪絵や玲子とちがいが、夫の仕事場のこととは話で聞くしか分からない。夏前にみ

せた不機嫌を、順平はどうやって解決したのか、あれ以来気がかりな言動はみられなかった。

「そうねえ。最近はいいんだけど、何か悩んでいるらしいのに打ち明けてくれない時期があったわ」

順平は、正しいと思つたことは曲げられないタイプだ。上司だろうが顧客だろうが、筋が通らないと思えば断固として妥協しないだろう。そんな一面は、彼を苦しめる要因にもなりかねない。

「また親の話なんだけど、お義母さんは甘い物が大好きでね、太り気味なの。それなのに、『太つてない！ 柔らかいだけ』って言うんだよ。面白いでしょう」

停滞しかけた空気を、明るくもどしてくれたのは玲子だった。雪絵と義父母の同居が始まったら、こんな風に遠慮無く話せる機会はそうそう持てなくなるのだろうか。

家に帰ると、まだ三時半だというのに、すでに帰宅した順平がソファーに寝転がっていた。人間ドックの受診日だったはずだ。「結果は、どうだったの」

「いつもと変わらん。高脂血症、高コレ

ステロール、胃も悪い」

「食事に気を付けているのにね」

「ストレスだ。こんな仕事してたら、健康になれん」

言うなり、足もとのクッションを荒々しく蹴り飛ばした。クッションは横々飛びに飛んで、食卓の脚にぶつかり跳ねた。

「ロバを飼いたい」と言つた順平に、小さな異変を感じたのは六月の末だった。

その後は平穩に過ぎていくと思ひこんでいたのに、彼の暗闇は胸間の奥深くに身を潜め、成長していたらしい。この不機嫌さは、あの時以上の強さになって噴出を始めるのだろうか。しばらく忘れていた分、再びの不安には身を刺すような痛みがあった。

(5)

秋分を過ぎたというのに、真夏並みの暑さが弱まる気配はなかった。

順平の鬱状態は、八月末から続いている。全身に陰鬱さをまとい、極端に無口になっていた。

今朝も、一言も話さずに出勤していた。あの、鞆をさげて。

四月から少しずつ進めている家の中の片づけは、一時にしろ不安を忘れさせてくれた。きれいに片づけ、おしやれに変わっていく過程と結果は、気分を変えてくれる。わずかな時間しか取れないが、毎日の安らぎになっていた。

実家をのぞきに行くのも、日課になっている。気分転換の片づけを昼前に切り上げ、車を走らせた。

いつものように洗濯、掃除、料理を手早く済ませていく。その間、父と母は二人並んでソファーにもたれ、若い頃の苦労話や好物の鯖寿司の話などをしていた。時折笑い声も聞こえる、なごやかな時間だった。

最後に、食卓の上に菓をそろえた。飲み忘れないように一袋ごとに日付を書き入れ、常に一週間分ぐらいを並べておく。新しいのを補充しようとする、昨夜と今朝の分がそのまま残っているのに気づいた。その都度声をかけて飲ませなくてはならぬ程、頼りなくなっていたのだ。巻き戻しのできない現実を、ため息にしてそっと吐き出す私の耳に、両親の無邪気な笑い声が聞こえていた。

その帰路、めつたに車の通らない線路沿いの細い道を走っていた。家が近づくにつれ心を占めていくのは、両親への心配から夫のことへと移っていった。

あの鞆のことは、どう考えたら良いのだろう。

通勤に使っている鞆は、ずっしりと重い。それが、夜になっても居間の床に放り出されたままだった。片づけようと、力を入れて持ち上げると、ひよいと軽く持ち上がってしまった。空っぽだったのだ。フアスナーを開けて中のがらんどどうを目にした時の驚きは、驚愕を超えて恐怖に近かった。

ノートパソコンはどうしたのだろう。「個人でパソコンを持たないと仕事が片づかないのに、会社は支給してくれない」そう言つて買った、自前のパソコンだった。仕事の詰まっていけない空の鞆を、彼は持ち帰つたのだ。

そして今朝も、空の鞆を掲げて出て行つた。その後ろ姿が、点描画のシルエットになつて脳裏に現れた。シルエットを構成する細かな点は徐々にまばらになつていき、やがて薄い影になり消えていった。

『まさか……自殺』

不吉な言葉が頭をよぎつた。

その瞬間、脇道から飛び出して来るパール色のアウデイが目に入った。悲鳴をあげたのと、ブレーキを強く踏みこんだのは同時だった。急ブレーキの反動で助手席のバッグが床に飛び、メモ帳やケータイやらが音を立てて散らかつた。

アウデイは、そのまま走り去つて行つた。そのパール色の車体が見えなくなるまで、私は無表情で見送つた。パール色は、両親が飲んでいる薬の包み紙の色だった。

そろそろとシートベルトを外すと、床に転がった物に手をのぼし、緩慢な動作で一つずつ拾い集めた。けだるさが、全身を支配していた。

ふいに喉のあたりが震え、嗚咽がもれた。思いもかけず涙がこみ上げてきた。

急ブレーキをかけたのは、怖かつた。飛び出しておいて平然と去っていくアウデイは、腹立たしかつた。しかし、こみ上げる涙のわけが他にあることを、この時はつきりと認めたのだつた。

衰えていく両親。なぐさめる術が分からない夫。痛みと恐れにとりつかれ、途

方にくれているだけの自分。張り詰めた私の神経には、やり場のない哀しみが巣くつていた。それが今、涙となつてあふれ出したのだ。

初めて認めた、自分の奥底にある情動だった。消化されない感情は、じわじわと心に暗い根を張るものらしい。わざと目をそむけてきたものが、こんな場面で一気に表出したのだ。

表出してしまったものは、全身でまともに受け止めるしかなかつた。

(6)

玲子はいよいよ義母の介護に迫られるようになり、雪絵は義父母との同居が始まつた。介護三姉妹が集まる機会は間遠になつていった。

久しぶりに三人がプールにそろい、水中を歩きながらおしゃべりに興じたのは、十一月になつていた。

その日の夕刻、簡単な料理が二品できた時、キッチン窓の外でカタンと金属音がした。プリウスが駐車場のグレーチングを踏んだ音だ。時計に目をやる。やっぱり、五時半。順平は毎日、この時刻に

帰宅するようになっていた。終業時刻と共に会社を飛び出してくるのだろう。彼の深い憂鬱は、夏の終わりからまだ続いていた。

黙って部屋に入ってきた順平は、空の鞆を床に放り出すとソファーに仰向けになった。前髪の分け目に、いつの間になんかに増えていたのか、白髪が密集している。まわりついていた憂鬱は、すっかり体の中までしみ込んでいようだ。「お帰りなさい」

私が抱える哀しみと不安の澱は深くて重かったが、明るく迎えたかった。

「今日、プールを出て着替えた時にね、私ったらブラを前後逆さにつけてたんだよ。ホックのないブラだから、頭から破るだけでいいの。その上にTシャツを着てただけけど、背中が天使の羽みたいにくれてるってレコちゃんに言われて、超ビックリ！」

かすかでのい、順平の笑いを見たかった。「あんたは」
「気楽でいいね」

返ってきたのは、嫌みなつぶやきだった。とたんに、激しい憤懣がわき起こった。

『私だって、
「気楽なんかじゃない！」』

荒々しい叫びが、胸の中で破裂した。飛び出しそうになる叫びは、震えだした指をギョツと握りしめることで、あやうく押しとどめた。それきり会話はとぎれどげとぎれ無言の空間だけが残った。

夕食のテーブルにつくと、順平の視線は私を避け、テレビと料理だけを往復した。チクチクと胸を刺す空気が、二人を冷たく分断した。目の前にいる順平が、得体の知れない遠くの闇に吸い込まれていくようだった。

私はもう、勇気を持って黙って見守ることに、耐えられなくなっていた。

「私、あなたに何か悪いことしたかなあ」
「全然」

吐き出される声にも、怒気と憂鬱があった。「でも……」

「あんたは悪くないよ。自分の問題だから自分の問題だから放っておいてくれと言うのか。あなたが苦しんでいるから、私もこんなに苦しいのに、何故それが分からないのか。苛立ちと悲しみに、きりきりとしめつけられた。」

核心に飛び込んでいきたい衝動を、もはや押さえることはできなかった。

「仕事で、何かあったの」

順平の視線は、あるはずのない向こう岸に向かって、泳ぐように逃げていった。その顔には、怒りの表情がはりついている。ぎゅつと結んだ口元の皮膚には、年齢以上の衰えがあった。鬢に混じる白い毛は、初老を感じさせた。

突然、私の胸に痛みが走った。彼の疲れ切った風貌が、声にならない言葉で私に何かを訴えているのを感じたのだ。

傷つき弱った魂が、必死になって訴えている。この怒りに見える表情は、何かに耐えようとする必死さが作り出したものなのだ。口を閉ざすのは、暴れ出したような感情を吹き出させまいとしているからなのだ。

ああ、なぜ私は理解しなかったのだろう。彼も叫んでいるのだ。一人で耐え、一人で戦っているのだ。

「やる時は心を込めて」と言う雪絵の声が、優しいシャワーになって降り注いだのはその時だった。言葉のシャワーは、苛立ちと悲しみを少しづつ洗い流していった。

そのあとに現れたのは、あなたと共に居たいという、ただそれだけの願いだった。

た。それは、一緒に悩んで一緒に考えたという一途な思いだった。固く握りしめていた拳から力が抜け、指はゆるゆるとほどけていった。

「私も一緒に悩めないの」

ゆっくり静かに、願いを声に置き換えた。「あなたが何を悩んでいるのか分からない。それが悲しいの」

「君を……悲しませている？」

向こう岸から視線をもどした順平が、孤独な漂流者の目を向けた。

ぼつぼつと、順平が語り始めた。その話から分かったのは、パワハラが横行する職場の現状だった。

ある取引先から、注文した物と納入品が違うという文句が来た。本社から転勤してきた上司は、事情も聞かずに順平が悪いと決めつけた。注文を受けた者から受け取った発注書と、順平が作った納品書の控えが手元にあった。それは、彼の段階では手違いが起きていない証拠であったが、上司は聞き入れないどころか大声でののしった。親身に面倒を見てきたものの若手達は、上司に取りなすことも

せず、そそくさと外回りに出ていった。似たようなことが、それ以降何度も繰り返された。上司から、ありもしないことをでっち上げられた時もあった。

近ごろでは、責任ある仕事は回されず、考えて処理せねばならぬ案件は素通りしていく。誠実に仕事に向き合っているのにと悔しく、認められないむなしさに耐えていた。

給料を多く取る者は冷遇し、苛酷なノルマで社員をしぼる。一方で、そんな職場でも何とかぶらさがるうとする非正規社員を歓迎する。そんな風潮がまかり通っているという。まさに、ブラック企業の実態だった。

訥々とはあったが、久しぶりに多弁な順平だった。話し終えて上げた顔から、怒りは消えていた。

「ロバを飼いたいと言ったことがあっただろう。ロバって、従順に重い荷物を運んでいるようだけど、急かされても忙しげに走ったりしない。力づくで引っぱって、頑として動かない時もある。のきなきなようで、ちゃんと意志を貫いて生

きているんだ。ロバはいいなあって思っただ」

やつと岸にたどり着いた漂流者の目から、鼻に沿ってツウーと流れ落ちたものがあつた。初めて見る、順平の涙だった。

(7)

冬の風の冷たさには、人に規律を求める厳しさがある。日の短さは、せき立てるように人を進ませる。

十二月の空は灰色で、夕暮れの色は暗く濃い。しかし順平には、少しづつ明るい色もどつていた。悩みを打ち明けて、苦しかった出来事を吐き出したからだろうか。彼を埋め尽くしていた悩みが、少しは軽くなったのだろう。

「ぼくは一人で悩み、もがいていた。それが君を苦しませているなんて、気づかなかつたんだ。恥ずかしいよ」

自分を振り返ることも、できるようになっていた。積もった澱で重くよどんでいた私の心も、軽くなつていった。

相変わらず定時帰宅は続いていたが、鞆をソフアーに投げ出すと台所になつてきて、夕食作りに手を出すようになった。

煮物の味付けと揚げものは、彼の分担になった。

「遅い時刻までサービス残業で居残つてる奴らもいる。でも俺は、閑職に追いやられたのを逆手にとるよ。定時帰宅して料理の腕を磨くでしょう」

鍋に向かい、居直りとも思えぬ爽やかさで言った。

休日の楽しみは、二人でする庭いじりになった。鉢を移動させたり、寄せ植えに挑戦したりしながら、取り留めのない話をする。順平は、どんな話題にも誠実に、あるいは笑いで応えてくれた。

彼が取りもどす明るさは、日に日に輝きを増すようだった。それにつれて、私も前向きになれた。

あれほど悩んでいた両親の老いを、素直な気持ちで受け入れられるようになってきたのは大きな変化だった。それぞれに覚束ない両親だというのに、いつもお互いを気遣い合っている。その姿はほほえましく、私を和ませてくれた。

この二人は、いつか私の名前を思い出せない日が来たとしても、お互いのことは忘れないだろう。私と順平も、こんな

ふうに仲の良い老後を過ごしたい。そう考えるようになった。

介護の悩みは、一人で抱え込まずに兄夫婦に相談し、協力し合うだけの気持ちの余裕も出てきた。

「要支援認定を受けて、デイサービスに通うようになったの。週二回ヘルパーさんも来てくれるしね。兄ちゃん夫婦と相談して、介護のパートナーも作ったのよ」
「それは良かった。大変だけど、できるだけのことをしてあげないとね」

いたわりの言葉は、本来の彼にもどった証だった。元にもどっただけなのに、それまで以上の充実と安心が、二人を包み込んでくれた。

ひっそりと、優しくぼやけていく夕暮れの空。庭はモノクロームに変化してはく。そこに立つ順平と私。それは景色ではなく、私の世界だった。

そつと握った彼の手が、ぬくかった。

(8)

こつこつと続けてきた家の掃除は、年末になってやっと、床や壁の汚れ落としと不要品の処理などの大仕事を終えた。

家から出たガラクタは、何もかもいっしょくたにして裏庭の隅に集めておいた。年末もその状態で、新年を迎えた。

順平の仕事始めとともに、そのガラクタ類を不燃物とリサイクルとに仕分けを始めた。あつちにまとめ、こつちに移動して、作業はいつこうに捗らないのに気分は浮き立った。きれいに片づいていく爽快感には、古い物や過去を捨て、生まれ変わっていく清新さもあつたのだ。

「タララララ、ララララ、ホイサッサ」
鳥刺しの歌をでたらめに口ずさみ、作業の時間は軽快に過ぎていった。

西の山に沈もうとする夕日が、裏庭から見上げる空を朱と紫のモザイクに染め上げていた。冷たい空気の中にも、やわらぎはあるのだ。

そろそろ夕食の下ごしらえにかかろうと、家に入り洗面所の鏡をのぞいた時、信じがたい発見をした。顔のシミが消えているのだ。

三十代の終わりにできた左目の下の濃いシミは、薬を飲んでも高価な化粧品を試しても消えなかった。最後は、意を決して受けたレーザー治療だったが、それ

も効果はなかった。それ程頑固なシミだった。このビッグニュースは、一番に順平に報告しようと思った。

順平は、すっかり以前の彼にもどって来る。人格を変える程に覆いかぶさっていた苦悩を、会社の状況は変えられないまでも、精神力でどうやら乗り越えたようだ。

「私の顔を見てね。無くなったものは、なあんだ」

「若さ」

食卓の向かいに座った順平は、突然のクイズにおどけて答えた。

「目の下を、よく見てよ」

「うん。あつ、分かった！ ハリだね」

ふざける彼に、プツとふくれてみせたが、シミが無くなったのよ。不思議でしょう」

「機嫌良く答えを教えた。」

「考えられる理由は、プールか仕事を辞めたことくらいなだけだ」

「仕事だよ。ストレスが原因だったんだ」

順平は言い切った。

「……俺も、今年で仕事を辞めようかなあ」

「思いもよらない言葉に、接ぎ穂を失った。」

定年まで、まだ五年もある。仕事を辞

めたら、年金を受け取るまでの十年間を無収入で生活することになる。それを覚悟の上で言っているのだろうか。頭をグルグルするのは、そんな現実的なことばかりだった。

そこに、いくつかのシーンがフラッシュバックして割り込んだ。

医院の仕事を辞めたいと言った時、順平は賛成してくれなかった。家のローンがあるからという理由は、納得できた。

しかし、娘のチナが結婚するまではと言われた時は、真意が分からず何度もたずねた。彼は口をつぐむだけだった。あの頃

の私は、へそを曲げているのだと単純に受け取っていた。

しかし、今なら分かる。妻もがんばって勤めていることが、時にはへし折れそうになる彼の気持ちを支えていたのだ。

「ロバに乗って会社に行く」と言い出したのも、職場の息苦しさや矛盾に追い詰められた精神が、逃げ場を求めていたからだ。

空っぽの鞆を持って通勤した頃は、彼の毎日でも空疎だったにちがいない。

仕事をリタイアした二人が未知の生活

をスタートさせるのは、まだ数年前のはずだった。でも、人生の計画が少し前倒してやってくるだけだと受け止めたら、いいのだろうか。

思いをめぐらせていると、ふいに闇夜を飾る打ち上げ花火のように、新しい感覚が光って広がった。

金銭的には不安だけれど、辞めてもいい。人生に吹いてくる風は、新鮮な方がいいに決まっているもの。一日中二人だけの生活が毎日続くなんで、どんなことになるのかワクワクするじゃない。

紙芝居の場面がストンと変わるようなあつけないほど深い気持ちの変化だった。

「順ちゃん、仕事、辞めてもいいよ」

順平は静かな笑みを浮かべた。私はそれを、安堵と開放感の笑みだと受け取った。

(9)

白梅の木は、今年も慎ましげな花をつけた。控えめな姿だが、春を真っ先に告げようとする力を冬の間ずっと秘めていたのだ。

順平の職場では、相変わらず居づらいうる気が続いているという。それなのに、

彼は、まだしばらくは頑張ってみるよ、
と言いだした。

「ブラック企業に立ち向かうのが困難だっ
てことは分かっている。でも、自分だけ
の問題ではない。みんな考えて、声を
上げられる職場にしたいんだ」

目をそらさずに話し続ける。

「職場が力を合わせれば、大きな力が生
まれる。少しでも前進させたいんだよ」
熱情的な思いを、甲子園を目指す球児
の明るさで語った。

彼が会社を辞めようかと言った時は、
退職にためらった私だった。だが、いつ
たん受けとめてしまつてからは、退職し
て始める二人の生活に平安を求めるよう
になつていた。だから、まだ勤めるよと
言われると、私にはまた不安がわいてきた。
手強い会社に、ペシヤンコにされるか
もしれない。私は彼を応援しなくては
いけないのだろうか。彼はもう決心したと
いうが、私は迷つていた。

それにしても、長い年月を共に生きて
きたものだ。すでに私は退職し、順平も
退職について考える年になつたのだから。
それを思うと感慨は大きい。

高校を卒業後、二人が再会したのは二
十三才の時だったから、もう三十年以上
も昔になる。はじけるように若い日々だった。
結婚後は貯金を頑張りすぎて、千円で
一週間を乗り切つたこともあった。激安
の食材で作つた料理を、笑い合つて食べ
たのがなつかしい。

流産を繰り返してやつと産まれたチナ
は、運動は得意なのに勉強が苦手だった
から、心配が絶えなかつたものだ。

その時時の心情が、過ぎ去つた過去に
似合わない鮮烈さでよみがえる。

幸せ続きの生活だつたけれど、三十年
という長い間には向き合わねばならない
困難も当然起きたし、それを越えても来
たのだ。

特にこの一年、順平は仕事のことです
いぶん悩んだ。社会の問題から、人生に
ついてまで考えさせられる出来事だった。
私も、弱つていく父と母のことでショッ
クを受けたけれど、人の一生を丸ごと受
け入れ見守る気持ちになれた。

それというのも、困つた時には一人で
抱え込んで閉じこもるよりも、誰かに心
を開いた方が前進できると分かつたから

だった。

「順ちゃん、私の心は順ちゃんに向か
つて全開よ。あなたも、そうでしょう？」

「えっ？ ああ、当たり前だろ」

脈絡のない突然の言葉を、順平は理解
してくれただ。

「二人なら、怖いもの無しね」

そう、二人なら、どんなことにも立ち
向かつていける。私たちの心が繋がつて
いれば、へこたれるはずは無いのだ。ロ
バはいいなあと考えだすような、つらい
思いはもうしない。だから、仕事を続け
ても大丈夫だ。

すつきりと明るい決着に、迷いは消えた。
すると、「ロバを飼いたい」と言つた順
平の発想が、面白く思えてきた。

強い意志を秘めながら、穏やかに生活
しているロバ、か……

そうだ！

「ねえ、ロバを飼いましよう！」

「え〜っ！？」

順平が素つ頓狂な声をあげた。

「心の中に、ですけどね」

しばらく考え込むようだった順平の顔
に、慎ましげに咲き誇る白梅の笑みが広

がった。まだ早い春が、細かな細かな光の粒を振りまいた瞬間だった。